

# 看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究の動向

## Current state of research into maintenance and improvement of practical nursing competence among nursing educators

伊藤 美鈴

Misuzu Ito

### 要 約

本研究の目的は、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究の動向を解明し、その結果を基に、看護学教員の看護実践能力維持・向上の実現に向け、取り組むべき研究課題を検討することである。

医学中央雑誌を用い「教員」、「看護実践」をキーワードとし、1983年から2015年に発表された国内文献で、研究の種類を「原著論文」、「会議録」として検索した。その結果、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する18件の研究を検索でき、これらを分析対象とした。データ化は「研究数と年次推移」、「研究の種類」、「研究内容」等により構成された分析フォームを用いた。Berelson, B.の内容分析の手法を用いて、各研究の目的・方法・成果をコード化し、コードの意味内容の類似性に基づいてカテゴリ化した。

分析対象とした研究は18件であった。年次推移は毎年1～3件、研究の種類は質的研究が55.6%を占めた。対象研究18件から20内容コードが抽出され、5カテゴリが明らかになった。5種類の特徴を持つ研究内容は、教員の看護継続教育の現状と評価、教員の自己認識、教員特性との関係の3つの側面から研究が行われていることを示唆した。具体的な教員の行動、教員に必要な看護実践能力、組織的な取り組みに関する研究が行われておらず、その必要性を示した。今後の研究課題として《看護学教員の看護実践能力維持・向上のための行動の解明》など3点を示唆した。

キーワード:看護学教員, 看護実践能力

### はじめに

平成元年（1989年）にわずか12校であった看護学教育を行う大学数は、その後、毎年増加を続けて平成27年（2015年）には250校を超えるまでに増加した<sup>1)</sup>。平成27年（2015年）の大学・短期大学等看護師養成所総数は1080校であり、就業する教員数は約18000人にのぼる<sup>2)</sup>。

大学・短期大学等看護師養成所に就業する看護学教員（以下、看護学教員）は、質の高い教授活動を展開するために、また、学生のロールモデルとなるために、さらには、自分自身の発達のために、看護学教員の資質の向上に努める責任がある。看護学教員の望ましい状態に関する研究<sup>3) 4)</sup>は、看護学教員に期待される資質を解明し、その中で最も重要なものは看護実践能力であることを明らかにした。また、厚生労働省による報告書<sup>5) 6)</sup>は、その中で、看護学教員は教育実践能力とともに看護実践能力の維持・向上が課題である

ことを示した。

看護学教員は、カリキュラムをより効果的に教授することや、学生に適切な技術指導を行い確実に目標達成に導くことが求められることから、実践的な能力が必要になる。また、教員が実習指導過程で展開する看護実践は、学生の看護実践に伴う患者への負の影響を回避する目的を持ち、患者の権利保障にかかわる。

先行研究<sup>7)</sup>は、看護学教員の臨床能力の維持・向上は急務の課題であることを明らかにした。さらに、教員は自己の看護実践能力の低下を把握し、その能力を維持・向上させていくことの必要性を理解しながらも<sup>8)</sup>、看護実践能力を維持・向上させていくことに困難をきたしていることを示した<sup>9)</sup>。

看護学教員の成長・発達支援に関する看護教育学研究が今後さらに発展し、看護学教員が望ましい状態に近づくために活用可能な成果を産出するためには、まず、これまでに累積されたわが国の研究の現状を把握し、今後の研究課題を明確にする必要がある。しか

し、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究の動向を明らかにした研究は存在しない。

以上を背景とした本研究は、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究の動向を解明し、その結果を基に、看護学教員の看護実践能力維持・向上の実現に向け、取り組むべき研究課題を検討する。

## 方法

### 1. 分析対象とする研究の検索

看護学教員の看護実践能力に関するわが国の研究を次のように検索した。医学中央雑誌を用い「教員」、「看護実践」をキーワードとし、1983年から2015年に発表された国内文献で、論文の種類を「原著論文」、「会議録」として検索した。その結果、総数311件の文献を検索した。次に311件の文献を精読し、実践報告や概説等の文献や本研究の目的に合致しない文献293件を除いた。目的に合致しない文献のほとんどは、学生の看護実践能力に関する看護学教員の知覚に関する研究であった。最終的に看護学教員の看護実践能力に関する論文研究18件を対象文献として選定した（資料1）。

### 2. 分析方法

#### 1) データ化

データ化には、先行研究が開発した分析フォーム<sup>10)</sup>から選定した「研究の種類」「研究対象」「研究内容」により構成された分析フォームを用いた。これに沿って分析対象とした研究の概要を整理した。また、各研究を精読し、その内容を端的に表すフレーズへと要約し、研究内容コードを作成した。

#### 2) 分析

まず、量的研究かあるいは質的研究かという視点に基づき、研究の種類を分類した。本研究は、量的研究と質的研究を次のように規定した。量的研究とは、時にコントロール可能な状況下に数量的データを収集し、統計学的手法を用いて分析した研究である<sup>11)</sup>。質的研究とは、研究者の印象を最小限にした手法を用いて、主観的・記述データを収集し、分析した研究である<sup>12)</sup>。また、データ収集や分析方法に量的・質的双方の手法を用いている研究は、量的研究と質的研究を併用した研究（以後、量質併用研究とする）と分類した。

次に、研究対象の看護学教員に関わる役割や立場に基づき、研究対象を分類した。

研究内容の分析には、看護教育学における

Berelson,B.の内容分析<sup>13) 14) 15) 16)</sup>の手法を用いた。作成した研究内容コードを意味内容の類似性に基づき分類し、カテゴリを形成した。そのカテゴリの内容を忠実に反映した表現を用いて命名した。

### 3. カテゴリの信頼性

カテゴリの信頼性を確保するために、次のような手続きを経て、検討した。まず、分析対象の中から無作為に研究論文を抽出した。次に、文献研究の経験を持つ看護学研究者3名に、抽出された研究論文の精読、カテゴリへの分類を依頼した。さらに、Scott,W.A.の式<sup>17)</sup>に基づき、カテゴリへの分類の一致率を算出した。信頼性確保の基準は、カテゴリへの分類の一致率70%<sup>18)</sup>とした。

## 結果

### 1. 分析対象とした研究数と年次推移

2015年までに発表された看護学教員の看護実践能力に関する研究は18件であった。研究数の年次推移は、2000年が1件、2001年が1件、2005年が1件、2007年が2件、2008年が2件、2009年が1件、2010年が2件、2011年が1件、2012年が2件、2013年が1件、2014年が1件、2015年が3件であった。

### 2. 研究の種類

研究の種類は、次のとおりであった。質的研究が10件（55.6%）、量的研究が7件（38.9%）、量質併用研究が1件（5.6%）であった。

### 3. 研究対象

研究対象の所属は、看護基礎教育17件（94.4%）、看護継続教育1件（5.6%）であった。抽出方法は、無作為抽出法11件（61.1%）、便宜的抽出法7件（38.9%）であった。研究対象の教員経験年数は、1年未満1件（5.6%）、5年以上10年未満1件（5.6%）、経験不問16件（88.9%）であった。

### 4. 研究の内容が形成したカテゴリ

研究18件から得られた研究内容コード数は20コードであった。これらは最終的に5カテゴリを形成した（表1）。これら5カテゴリに沿って結果を論述する。

【1. 看護学教員の看護継続教育につながる要素としての看護実践能力】（10コード：50%）

このカテゴリは、看護学教員の成長発達に向けて看

表1 看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究内容 (n = 20)

研究内容	コード	カテゴリー	ポイント
<ul style="list-style-type: none"> <li>看護学教員の教授能力向上のための行動からみた看護学教員の看護実践能力</li> <li>大学に就業する看護学教員の実習における教授活動と看護実践能力との関係</li> <li>看護学教員との連携を体験した病棟看護師が捉える看護学教員の持つべき看護実践能力</li> <li>実習における看護現象の教材化のために必要な要素としての看護学教員の看護実践能力</li> <li>看護系大学における看護実践能力育成のために必要な要素としての看護学教員の看護実践能力</li> <li>在宅看護論を担当する看護学教員に求められる看護実践能力</li> <li>看護学教員の成長につながる内容としての看護学教員の看護実践能力</li> <li>看護学教員のキャリア発達支援を目的とした看護学教員の看護実践能力維持・向上のための教育内容</li> <li>看護学教員のキャリア形成に影響する内容としての看護実践能力</li> </ul>			<p>1-1) 看護学教員の教授能力向上のために必要な要素としての看護実践能力 (6)</p> <p>【1. 看護学教員の看護継続教育につながる要素としての看護実践能力】 (10 : 50%)</p>
<p>1-3) 看護系大学に所属する若手教看護学教員の看護実践に関する学習ニーズ (1)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>看護学教員の看護実践能力に関する自己認識</li> <li>看護学教員の看護実践能力に関する自己評価</li> <li>看護学教員の看護実践能力に関する自己評価と教員特性との関係</li> <li>看護学教員の看護実践能力に関する自己認識</li> </ul>			<p>1-2) 看護学教員のキャリア形成につながる内容としての看護実践能力 (3)</p> <p>【2. 看護学教員の看護実践能力に関する自己認識】 (5 : 25%)</p>
<p>2-2) 学生が知覚する看護学教員のロールモデル行動としての熟達した看護実践能力を示す看護学教員の行動 (1)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2年課程看護専門学校に就業する看護学教員の望ましい状態に関する特性からみた看護学教員の看護実践能力</li> <li>看護学教員の看護実践能力と教員特性との関連性</li> <li>看護学教員の看護実践能力維持・向上を目的とした短期研修の効果</li> <li>看護学教員の臨床研修における経験内容としての看護実践</li> </ul>			<p>2-1) 看護学教員の看護実践能力に関する自己評価 (4)</p> <p>【3. 看護学教員の看護実践能力と教員特性との関係】 (2 : 10%)</p> <p>【4. 看護学教員の看護実践能力維持・向上を目的とした研修における経験】 (2 : 10%)</p> <p>【5. 看護系大学のFD・SDマップ開発に関連する内容としての看護学教員の看護実践能力】 (1 : 5%)</p>

※ ( ) 内はコード数を示す

護実践能力が影響することを解明した研究から形成された。このカテゴリに該当する研究内容コード数は10コードで、全体の50%であった。研究内容コード数の年次推移は、2001年が1コード、2009年が1コード、2010年が2コード、2011年が1コード、2012年が1コード、2013年が1コード、2014年が1コード、2015年が2コード、であった。

また、このカテゴリは、次の3種類の内容から形成された。その内容とは、「看護学教員の教授能力向上のために必要な要素としての看護実践能力」、「看護学教員のキャリア形成につながる内容としての看護実践能力」、「看護系大学に所属する若手教看護学教員の看護実践に関する学習ニーズ」であった。

【2. 看護学教員の看護実践能力に関する自己認識】(5コード：25%)

このカテゴリは、看護学教員の看護実践能力に関して実施している自己評価の内容を解明した研究から形成された。このカテゴリに該当する研究内容コード数は5コードで、全体の25%であった。研究内容コード数の年次推移は、2000年が1コード、2005年が1コード、2007年が1コード、2008年が2コードであった。

また、このカテゴリは、次の2種類の内容から形成された。その内容とは、「看護学教員の看護実践能力に関する自己評価」、「学生が知覚する看護学教員のロールモデル行動としての熟達した看護実践能力を示す看護学教員の行動」であった。

【3. 看護学教員の看護実践能力と教員特性との関係】(2コード：10%)

このカテゴリは、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関して教員特性との関連性を解明した研究から形成された。このカテゴリに該当する研究内容コード数は2コードで、全体の10%であった。研究内容コード数の年次推移は、2008年が1コード、2015年が1コードであった。

また、このカテゴリは、次の1種類の内容から形成された。その内容とは、「看護学教員の看護実践能力と教員特性との関係」であった。

【4. 看護学教員の看護実践能力維持・向上を目的とした研修における経験】(2コード：10%)

このカテゴリは、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研修での経験を解明した研究から形成された。このカテゴリに該当する研究内容コード数は2コードで、全体の10%であった。研究内容コード数の年次推移は、2007年が1コード、2008年が1コードであった。

また、このカテゴリは、次の1種類の内容から形成された。その内容とは、「看護学教員の看護実践能力維持・向上を目的とした研修における経験」であった。

【5. 看護系大学のFD・SDマップ開発に関連する内容としての看護学教員の看護実践能力】(1コード：5%)

このカテゴリは、看護系大学FD・SDマップ開発の中の看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する内容を解明した研究から形成された。このカテゴリに該当する研究内容コード数は1コードで、全体の5%であった。研究内容コード数の年次は2012年であった。

また、このカテゴリは、次の1種類の内容から形成された。その内容とは、「看護系大学のFD・SDマップ開発に関連する内容としての看護学教員の看護実践能力」であった。

## 5. カテゴリの信頼性

カテゴリの分類の一致率は、86.6%、79.1%、89.2%であった。これは、本研究が明らかにした5カテゴリが信頼性を確保していることを示した。

## 考 察

本研究の結果、看護実践能力維持・向上に関する研究の概要および研究内容の現状が明らかになった。以下、それらの特徴について考察し、看護学教員の看護実践能力維持・向上の実現に向け、取り組むべき研究課題を検討する。

1. 年次別研究数、研究の種類、研究対象の所属からみた看護実践能力維持・向上に関する研究の動向と特徴

1) 分析対象とした研究数と年次推移

2015年までに発表された看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究は18件であった。研究数の年次推移は毎年1～3件であった。このことは、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究が着目されおらず進んでいない状況を示す。

2) 研究の種類

研究の種類は、質的研究が10件(55.6%)、量的研究が7件(38.9%)、量質併用研究が1件(5.6%)であり、質的研究が55.6%とその半数以上を占めていた。看護学教員が、その看護実践能力を維持向上し、看護実践・教育を展開するためには、「看護の現にある状況」もしくは「ありのままの状態」を研究的に明らか

にし、そこから理論を展開していく必要がある<sup>19)</sup>。そのためには看護に関わる現象を量的データとし、それらを何らかの方法で分析しなければならない。

### 3) 研究対象

研究対象の所属は、看護基礎教育17件 (94.4%)、看護継続教育1件 (5.6%) であり、看護基礎教育が94.4%とそのほとんどを占めていた。このことは、看護学教員の看護実践能力に関する問題が看護基礎教育において発生している状況を示す。すなわち看護学教員の看護実践能力は基礎教育において発揮されている状況を示す。

## 2. 研究内容からみた看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究の特徴

看護実践能力維持・向上に関する研究内容を分析した結果、次の5カテゴリが形成された。5カテゴリとは、【1. 看護学教員の看護継続教育につながる要素としての看護実践能力】【2. 看護学教員の看護実践能力に関する自己認識】【3. 看護学教員の看護実践能力と教員特性との関係】【4. 看護学教員の看護実践能力維持・向上を目的とした研修における経験】【5. 看護系大学のFD・SDマップ開発に関連する内容としての看護学教員の看護実践能力】である。

これら5種類の看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究内容の特徴のうち、

【2】【4】は、看護学教員が看護学教員を対象に、各々の看護実践能力の認識やそれらの評価に焦点を当てた研究から形成された。

これらの研究の中では、具体的に看護学教員が看護実践能力を向上させていくための方法を明らかにした研究は存在しない。これらのことから、看護学教員が、看護実践能力を向上させていくための行動を見いだせないまま過ごしている可能性が示唆される。

また、成人期にある看護学教員は、自分に関することを自分で考え決定し、成し遂げたいというニーズをもっており、またそれらができる存在として自己をとらえている<sup>19)</sup>。看護学教員が看護実践能力を効果的に向上させていくためには、自己の看護実践能力を向上させるための行動を客観的に評価することが必要である。そのために、看護学教員が実践している看護を質的に明らかにし、その能力を客観的に自己評価する尺度が必要であることが示唆される。

以上は、看護学教員の看護実践能力維持・向上の実現に向け、取り組むべき研究課題として《看護学教員

の看護実践の解明》および《看護学教員の看護実践能力を自己評価する尺度に関する解明》を実施していくことが必要となることを示唆した。

これら5種類の看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究内容の特徴のうち、

【1】【5】は、看護学教員が教授能力の向上、キャリア形成につなげるために看護継続教育実践の中での、自身の看護実践の現状に焦点を当てた研究から形成された。

先行研究<sup>20) 21)</sup>は、看護学教員が、看護学教員としての望ましい状態に近づくために、

自己の職業経験を量・質ともに豊かにすること、看護職を価値づけられるような経験を重ねていくこと、看護実践能力の向上を図ることを課題として挙げている。看護学教員の現状は多種多様な仕事内容に忙殺され、看護実践能力維持・向上に関する行動をとることが困難な状況にある。看護学教員の看護実践能力維持・向上のために組織的なFD・SD活動を企画し、具体的に運営していく必要がある。

以上は、看護学教員の看護実践能力維持・向上の実現に向け、取り組むべき研究課題として《看護学教員の看護実践能力維持・向上のためのFD・SD活動の企画・運営の構築》を実施していくことが必要となることを示唆した。

これら5種類の看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究内容の特徴のうち、【3】は、看護学教員の看護実践能力と教員の特性との関係に焦点を当てた研究から形成された。

看護学教員は自身の看護実践能力が看護教育に及ぼす影響が強いと認識している。そのため、看護実践能力と教員自身の特性の解明に着手している。研究成果で明らかになった教員特性を身につけることで看護実践能力の向上を計っている。

これらの研究は、その中で、看護実践能力を、「低い」から「非常に高い」までの5つの選択肢を用い、定性的に測定した。そのため、「看護学教員は、看護実践能力が高いほど望ましい状態にある」ことは示唆されるものの、これを経験的に検証された命題とみなすことはできない<sup>22) 23) 24) 25)</sup>。これを仮説とし、看護実践能力を定量的に厳密に測定することが必要となる。

以上は、看護学教員の看護実践能力維持・向上の実現に向け、取り組むべき研究課題として《看護学教員の看護実践能力と教育の質の関連の解明》を実施していくことが必要となることを示唆した。

## 結 論

1. 本研究の結果は、看護学教員の看護実践能力維持・向上に関する研究内容を表す次の5カテゴリを明らかにした。

【1. 看護学教員の看護継続教育につながる要素としての看護実践能力】

【2. 看護学教員の看護実践能力に関する自己認識】

【3. 看護学教員の看護実践能力と教員特性との関係】

【4. 看護学教員の看護実践能力維持・向上を目的とした研修における経験】

【5. 看護系大学のFD・SDマップ開発に関連する内容としての看護学教員の看護実践能力】

2. 本研究の結果明らかになった5種類の特徴を持つ研究内容は、3つの側面から研究が行われていることを示唆した。

1) 看護学教員の看護継続教育の中での看護実践の現状

2) 看護学教員の看護実践能力の認識と評価

3) 看護学教員の看護実践能力と教員特性との関係

3. 看護学教員の看護実践能力維持・向上の実現に向け、取り組むべき研究課題4点を明らかにした。

《看護学教員の看護実践の解明》

《看護学教員の看護実践能力を自己評価する尺度に関する解明》

《看護学教員の看護実践能力維持・向上のためのFD・SD活動の企画・運営の構築》

《看護学教員の看護実践能力と教育の質の関連の解明》

## 引用文献

- 1) 日本看護協会出版会：平成27年度看護関係統計資料集. 日本看護協会出版会（東京），34-35，2016.
- 2) 日本看護協会出版会：平成27年度看護関係統計資料集. 日本看護協会出版会（東京），vi - vii，2016.
- 3) 亀岡智美，舟島なをみら：看護学教員の教育ニーズの現状とそれに関係する特性の解明. 日本看護研究学会雑誌，29(5)：27-38，2006.
- 4) 伊藤美鈴，松田安弘ら：2年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関する研究—現状及び関係する教員の特性に焦点を当てて—. 群馬県立県民健康科学大学紀要，10:1-23，

2015.

- 5) 小山真理子ら：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 厚生労働省（東京），2007.
- 6) 永山くに子，石渡祥子ら：今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書. 厚生労働省（東京），2010.
- 7) 広瀬信子，斎藤孝子ら：看護学教員の看護実践能力の自己評価と教員特性との関係. 日本看護学会誌，17：100，2007.
- 8) 林美栄子：看護教員の看護実践能力についての自己認識—看護師養成所教員の実態調査—. 看護展望，30(9)：1064-1071，2005.
- 9) 折山早苗，大丸美智子ら：看護教員における看護実践能力に関する自己認識および短期研修の効果. 看護展望，33(6)：626-632，2008.
- 10) 野本百合子，鈴木純恵ら：1989～1993年におけるわが国の基礎看護学教育に関する研究の動向と特徴—研究方法と研究内容に焦点を当てて—. 看護教育学研究，4(1)：14，1995.
- 11) Polit D.F., Beck C.T.: Nursing Research. Lippincott Williams & Wilkins (Philadelphia), 7th Edn., 15-16, 2004.
- 12) Polit D.F., Beck C.T.: Nursing Research. Lippincott Williams & Wilkins (Philadelphia), 7th Edn., 16-17, 2004.
- 13) バーナード・ベレルソン，稲葉三千男ら：内容分析. 社会心理学講座. 7 大衆とマス・コミュニケーション. 3, みすず書房（東京），47-73，1957.
- 14) 舟島なをみ：質的研究への挑戦. 医学書院（東京），40-79，2007.
- 15) Polit D.F., Beck C.T. : Nursing Research. Lippincott Williams & Wilkins (Philadelphia), 7th Edn., 269, 2004.
- 16) ナンシー・バーンズ，スーザン・K. グローブ：バーンズ&グローブ看護研究入門—実施・評価・活用—. エルゼビア・ジャパン（東京），601-602，2009.
- 17) Scott W.A.: Reliability of Content Analysis : The Case of Nominal Scale Coding. Public Opinion Quarterly, 19: 323, 1955.
- 18) カテゴリーの一致率70%を信頼性確保の基準とすることを明記した文献は次の通りである。
  - ・山下暢子，舟島なをみ：看護学実習における学生経験を解明した面接方法の現状—質問項目に焦点を当

- てて一. 看護教育学研究, 13(1): 79-84, 2004.
- 上田貴子, 亀岡智美ら: 病院に就業する看護師が展開する卓越した看護に関する研究. 看護教育学研究, 14(1): 37-50, 2005.
  - 茂木佐智子, 三浦弘恵ら: 看護専門学校の教務主任が直面する問題に関する研究. 日本看護学教育学学会誌, 21: 123, 2011.
  - 鎌田由美子, 松田安弘ら: 教員による2年課程看護専門学校学生のレディネスの把握に関する研究—看護学実習における教授活動に焦点を当てて—. 日本看護学会抄録集 看護教育, 第43回: 141, 2012.
  - 高橋裕子, 松田安広ら: 看護学教員による実習記録へのフィードバックに関する研究—学生が学習活動の促進につながったと知覚する記述内容に焦点を当てて—. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 9: 13-33, 2014.
  - 丸山公子, 松田安広ら: 看護師長がスタッフ看護師への個別指導上直面する問題の解明. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 9: 35-53, 2014.
- 19) 舟島なをみ: 質的研究への挑戦. 医学書院(東京), 25, 2005.
  - 20) 亀岡智美, 舟島なをみら: 看護学教員の教育ニーズの現状とそれに関する特性の解明. 日本看護研究学会雑誌, 29(5): 27-38, 2006.
  - 21) 伊藤美鈴, 松田安弘ら: 2年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関する研究—現状及び関係する教員の特性に焦点を当てて—. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 10: 1-23, 2015.
  - 22) 舟島なをみ: 看護教育学研究—発見・創造・証明の過程. 医学書院(東京), 303, 2010.
  - 23) 亀岡智美, 舟島なをみ: 経験的検証の特徴・評価基準・実際. 看護研究, 34(2): 79-85, 2001.
  - 24) Fawcett J.: Analysis and Evaluation of Nursing Theory. F.A. Davis Co. (Philadelphia), 253, 1993.
  - 25) Fawcett J.: Analysis and Evaluation of Nursing Theory. F.A. Davis Co. (Philadelphia), 252, 1993.

## 資料1 本研究の分析対象となった文献一覧

- ・薄井嘉子, 前川幸子ら: 看護教員の成長につながる質的転換. 日本看護科学学会 学術集会講演集, 35 : 487, 2015.
- ・小林睦, 竹尾恵子ら: 看護教員としての能力とその自己評価に関する研究. 佐久大学看護研究雑誌, 7(1) : 45-54, 2015.
- ・伊藤美鈴, 松田安弘ら: 2年課程看護専門学校教員の看護学教員としての望ましい状態に関する研究—現状及び関係する教員の特性に焦点を当てて—. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 10 : 1-23, 2015.
- ・木口幸子, 定廣和香子ら: 大学教員の看護学実習における教授活動の質と看護実践能力との関係. 日本看護学教育学会誌 学術集会講演集, 24 : 175, 2014.
- ・佐藤幸子, 細谷たき子ら: 看護学教員のキャリア発達支援に関する取り組みと今後の課題. 日本看護科学学会 学術集会講演集, 33 : 219, 2013.
- ・飯岡由紀子, 松本直子ら: 看護系大学における FD・SD マップの開発. 聖路加看護学会誌, 16(3) : 38-46, 2013.
- ・土肥美子, 細田泰子ら: 看護系大学に所属する若手教員の学習ニーズとその関連要因. 大阪府立大学看護学部紀要, 18(1) : 33-44, 2012.
- ・照井レナ, 村松真澄ら: 大学教員との連携を体験した看護師が捉える大学看護教員の持つべき臨床実践能力. 日本看護科学学会 学術集会講演集, 30 : 380, 2010.
- ・池田智子, 齊藤理恵子: 臨地実習場面における教材化の分析. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 7 : 59-67, 2011.
- ・小笹美子, 大塚真理子ら: 看護教育研究 大学教育における看護実践能力育成に関する現状と要素. 看護教育, 51(10) : 886-891, 2010.
- ・草柳かほる: 看護教員のキャリアを支えるもの 看護実践力認知と就業継続意思との関連性 (看護学校教員の場合). 日本看護学教育学会誌 学術集会講演集, 19 : 171, 2009.
- ・折山早苗, 大丸美智代ら: 看護教員における看護実践能力に関する自己認識および短期研修の効果. 看護展望, 33(6) : 626-632, 2008.
- ・藪田素子, 安井良江ら: 看護教員の臨床研修における経験内容. 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 3 : 1-11, 2007.
- ・廣瀬信子, 齋藤孝子ら: 看護学教員の看護実践能力の自己評価と教員特性との関連性に関する研究. 共立女子短期大学看護学科紀要, 3 : 95-102, 2008.
- ・広瀬信子, 齋藤孝子ら: 看護学教員の看護実践能力の自己評価と教員特性との関係. 日本看護学教育学会誌 学術集会講演集, 17 : 100, 2007.
- ・林美栄子: 看護教員の看護実践能力についての自己認識 看護師養成所教員の実態調査. 看護展望, 30(9) : 1064-1071, 2005.
- ・富安真理: 在宅看護論担当教員に求められる看護実践能力の意義に関する実態調査 臨地実習における教員自身の看護実践とのかかわりに焦点をあてて. 日本看護学教育学会学術集会講演集, 11 : 134, 2001.
- ・松田安弘, 本郷久美子ら: 看護学教員のロールモデル行動に関する研究. 千葉看護学会会誌, 6(2) : 1-8, 2000.



# Current state of research into maintenance and improvement of practical nursing competence among nursing educators

Misuzu Ito

## Abstract

This study was conducted to elucidate the trends in research into the maintenance and improvement of practical nursing competence among nursing educators, and to use the results as the basis for investigating issues that should be addressed in future research, in pursuit of achieving maintenance and improvement of practical nursing competence among nursing educators. The Igaku Chuo Zasshi online database was searched using the keywords “educator” and “nursing practice” to identify Japanese articles published between 1983 and 2015 categorized as “original articles” or “conference minutes.” Data creation was done using an analysis form composed of “number of studies and annual trends,” “type of research,” “research content” and other data. Berelson's technique for content analysis was used to code the objectives, methods, and results of each study and to categorize codes based on similarities in semantic content.

Eighteen articles on studies were subjected to analysis. The annual trend was one to three articles per year and qualitative studies accounted for 55.6% of the total. Twenty content-related codes were extracted from the 18 articles and five categories were revealed.

d. The content of research with these five characteristics suggested that research was being conducted from three aspects: current state and evaluation of educators' continuing education for nurses, educators' self-awareness, and the relationship with educator characteristics. The findings of this study suggested three points for future research topics, including “elucidating the actions required to maintain and improve practical nursing competence among nursing educators.”

*Keywords:* Nursing educators, practical nursing competence